令和５年１０月４日

農作物生育・技術情報10号

日高農業改良普及センター日高西部支所
JAびらとり　JA門別町

１　水　稲

○収穫後のほ場管理

（１）稲わらの処理

稲わらは、ほ場に放置せず速やかに搬出すること。

（２）透排水性の改善

溝堀りで表面排水、必要に応じ、心土破砕を実施。

秋起こしを行う場合は、水田の乾燥状態を確認し早め（地温があるうちに）に行う。

（３）畦などの確認

畦の補修や排水溝の掃除を行い、機能を回復させる。

（４）土壌診断の実施

低タンパク米生産のためにも、３年に１度は水田の土壌診断を行い、収量や地力に合わせて肥料の見直しを行う。また、必要に応じて苗床のｐH確認も合わせて実施すること。

２　主要野菜

作　物　名	生　育　状　況	技　術　対　策
トマト	・４～９段収穫中。 ・灰色かび病（ゴーストスポット）、すすかび病、うどんこ病、裂果が見られる。	・ハウスの閉めきりは避ける。 ・老化葉は摘葉し、通気性をよくする。 ・夕方は早めにハウスを閉める、内張りカーテンや暖房機を使用するなど、夜温13℃以上を確保するよう努める。
ﾊｳｽ軟白ねぎ	・５～６月定植収穫中。 ・アザミウマ類、葉先枯れ症状が見られる。	・もみ殻は搬出する。 ・土壌病害虫が発生したほ場は計画的に土壌消毒を行う。
アスパラガス （ハウス立茎）	・９月下旬に収穫終了した。 ・茎葉の黄化が始まっている。 ・灰色かび病、斑点病が見られる。	・ハウスを開放し、茎葉の黄化を促す。 ・茎葉が80%以上黄化し、地際部の茎の中がストロー状になったのを確認してから刈り取る。
きゅうり （まりん、勇翔、ちなつ）	・生育は順調で、中～上段位の孫づるの収穫が進んでいる。 ・うどんこ病の発生が一部のほ場で見られる。	・うどんこ病、べと病の防除には、予防効果の高い薬剤と、治療効果を伴う薬剤を使い分け、防除効果を高める。 ・気温の低下が予想される場合は、夜温13℃を目安に内張りカーテン等で保温する。

３ 畑　作

（１）秋まき小麦の雪腐病防除（なまぐさ黒穂病防除）

近年、雪腐病の発生が見られている。防除時期は根雪直前が最も効果が高いが、ほ場状態や作業の都合で散布できない場合があるため、遅れないように防除すること。散布後に降雨に遭遇すると効果が低下するため、残効性の優れた薬剤を選択する。

《防除例》フロンサイドSC　1000倍

【残効の目安】　散布後根雪までの積算降水量120㎜（日最大降水量65㎜）

４ 畜　産

○牧草

（１）牧草の最終刈り取り

牧草の越冬のため、牧草に十分な再生量と貯蔵養分を蓄えさせること。「刈取り危険帯」の刈取りを避ける。

刈取り危険帯	
アルファルファ	9月下旬～10月中旬
オーチャードグラス	10月中旬～下旬
ペレニアルライグラス	10月中旬～下旬

（２）雑草処理

・採草地でのギシギシ類の秋処理による防除は、最終採草後に行い、降霜前までに終えること。

・ギシギシ類への除草剤の散布時期は、葉が手のひら大になった時期が目安。

・新播草地は、更新後のギシギシ類の発生状況を確認し、除草剤散布を行う。薬量が経年草地と異なるため、以下の表を参考に適正散布を心がけること。

薬剤名	使用濃度・注意点　（水量100ℓ/10a）	
	新 播 草 地	経 年 草 地
アージラン液剤	10月上旬～中旬 薬量：200mℓ～300mℓ/10a ※春期には種した草地にのみ使用	10月上旬～中旬 薬量：300mℓ～400mℓ/10a
ハーモニー75DF水和剤	薬量：0.5～1.0g/10a ※ギシギシの葉が展開し、ギシギシ草丈が20cm以下	薬量：3g/10a

○サイレージ用とうもろこし

・収穫後の堆肥の施用上限はK_2Oで20kg/10ａ相当量以下とし、堆肥の分析値がない場合、施用上限量は５t/10ａを目安とする。

・堆肥の施用時期は、10月中旬以降、積雪、土壌凍結前までとし、散布後は土壌と混和する。

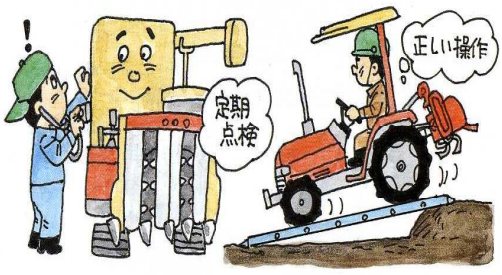
５ 農作業安全対策

【農作業安全の実践・確認項目】

○休憩を取り無理のない作業

○農作業や機械作業に適した服装

○**点検・整備は、必ずエンジン停止**

○油断せず後方確認、足下注意

○農道の走行時は路肩の状況を確認